

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



近

くの小川の岸を歩いているとカイツブリが2〜3羽泳いでいるのを良く見かけます。特に珍しい鳥ではありませんが、非常に警戒心の強い鳥です。なかなか近づきにくい鳥です。人の気配を感じたらすぐ潜ってしまうからです。潜水の得意な水鳥で、ちよつと目を離すと潜って、もうそこには見えなくなつてどこに姿を現すか見当もつきません。途方もないところに浮かび上がってくるので「カイツブリの八丁もぐり」といわれます。陸上では生活しないのでいつも水面を泳いでいます。飛ぶときは水面すれすれのところを水で蹴つて低く飛び、高く飛び上がることはありません。木の枝に止まつていたりすることもあります。木の下に止まると腹側を見るのも困難です。

カイツブリ科、カイツブリ属、留鳥です。夏でも冬でも1年中どこかで見ることが出来ます。体長26センチ、翼開長45センチ、体重150〜200グラム、ケレケレケレ、キョルルルル、リリリリリリなどと鳴きます。尾

は短くて外からはほとんど見えません。首は長く、嘴(くちばし)は細くながっています。脚はずつと後ろにあり、各指の両側には水かきがあります。雄雌同じ色ですが背面は灰黒色で下面は白く首の下部は黄褐色、完全な水上生活で、陸上に上がつて生活することはありません。

ヨーロッパ、アジア、アフリカ、オーストラリアなど広く分布しています。水草や葉や茎を集め、水に浮かぶ巣をつくりまわす。白またはクリーム色の長径37センチ、短径25センチの卵を3〜6個産みます。20〜25日で孵化します。生れてすぐから泳ぐことができ、親はしばらくの間背の上に乗せて育てます。親が巣を留守にする時は、卵の上に草の葉などをかぶせて、見えないように隠して巣を離れるので、なかなか見つかりません。食べ物に得意の潜りで水中からいろいろな物を探してきます。小魚、エビ、タニシ、ヒシ、ヤゴなど馳走がいっぱいです。

ちよつと変わった習性の持ち主だから、もし捕獲したとしてもわが家で

飼育することは出来そうにありません。子供の頃川へ遊びに行く場所にはカイツブリが先に泳いでいたので、いつも同じ場所まで泳いでいたので、熊本の方言名は「キヤツグリ」といいますが、十町川では「キヤツグリ」といいます。「キヤツグリの頭に火がついた、ずぶつとしずだりや、きやーきえた」こんな無邪気な歌を大声で歌いながらカイツブリの泳ぎ場へ飛びこんだものです。パンがヨシの茂みの近くの淀みに居ることが多いのですが、パンは潜らずにヨシの茂みに泳ぎながら隠れてしまっています。



カイツブリ

歴史調査の楽しみ方

江 栗 城 跡

8

大田 幸博

(元菊池川流域同盟 和水町水援隊長)

I 郭の調査は、西側の絶壁下を残すのみと、先月号に書きましたが、まだ、H区も残っていました。今月は、やつと、I郭の写真撮影が出来ました。現場写真は、暗れていると樹木の影が映り、遺構が不鮮明になります。薄曇りの日が最適ですが、中々そのチャンスが巡ってきません。

H区(北斜面)

この区画は、B区(標高46〜45m)の北下に位置する斜面です。高低差4mの崖面を挟んで造成地が追地(標高28m)まで連なっています。杭打ちを終えて測量に入りました。(35)は、4段の带状地形で、標高41〜34mに位置します。3段目は、長さ20m、最大幅3mで、上段との高低差が2mあります。このH区は、凹地の状態にあり、傾斜が急なので、登り下りにかなりの困難を伴います。

(36)は、詳しく調べた結果、凝灰岩の石切り場跡であるとの判断に至りました。採石層が見つかりました。活動時期は、分かりませんが古く感じます。言い伝えが残っていません。この事で、I郭西下の凝灰岩の絶壁ラインも、同類との考えに至りました。この西下については、今後、調査を進めて、石切り場跡の南限を確認します。と言うのも、元来、このラインには、凝灰岩が露頭していた可能性があり、後世に

それを活用したとの見方が自然です。城時代は、この露頭ラインが、I郭の守りに有効に働いた事は、確実でしょう。

写真解説

写真①は、遺構番号(30)の南側法面を、南西側から撮影したものです。調査員の背丈からも分かりますが、4.5mもの高さがあります。直状態に削り落されている事が分かります。この様にすれば、敵方は、まず登れませんので、上段からの攻撃が、より効果的になるのです。

写真②は、遺構番号(21)で、地表面は、驚く程、真つ平らで、全長35m、最大幅5mあります。非常に造成の度合が高い区画です。



写真① (30)の南側法面(削り落とし)



写真② (21)の平場



江栗城跡 周辺図

付記

香川県の丸亀城を見学しました。日本で一番小さな、現存木造天守に登りました。高さ15m、3層3階の造りです。びっくりしましたが、階段が余りに急で、手すりなしがみつきながら、やつとこのこと登りました。よく、転落事故が起きないもの、妙に感心しました。万治2年(1658)からの城主は、京極氏です。子孫の方は、大学の先輩なので、親しみの湧く城です。